

厳しさを増す下宿生の生活 情報収集と節約の工夫で乗り切る

下宿生の進学マネープラン

下宿生の生活が厳しさを増している。下宿を避けるため地元の大学を志望する傾向も強まっているが、地方によっては選択肢が限られ、下宿を前提としなければ志望校を選べない学生がいるのも確かだろう。そこで、下宿生の進学マネーの問題を考えてみたい。この不況下、果たして進学・下宿をするにはどのようなお金の準備、対策があるのか。

生活費、30年前の水準！

2010年秋に実施された、全国大学生協連の「学生生活実態調査」によると、下宿生の生活費は毎月11万7770円で、ここから住居費を除いた額は毎月6万3130円だった(図表1)。これは30年前、1980年の6万2110円に迫る低い金額だ。物価の上昇を考慮すると、下宿生の生活は30年前よりも厳しい状況にあると言える。

厳しい生活費の背景には、長引く不況による親の経済力の低下がある。同調査によると、下宿生の仕送り平均額は4年連続で減少し、

7万1310円。4人に1人は5万円未満で、10人に1人は仕送り「ゼロ」となっている。

また、下宿生のアルバイト収入は前年から2・1%(470円)減少している。特に自宅生を含めた4年生の減少幅が大きい(5・8%減)。長期化する就職活動がアルバイトの時間を奪い、これが下宿生の生活費の低下の一因にもなっていると考えられる。

奨学金に支えられた学生生活

実際、下宿生はどのような生活を送っているのか。都心で下宿生活を送る二人の学生に尋ねた。

秋田出身で東京・日野市に住む

話す。また、無事就職内定を得たものの「奨学金がきちんと返済していけるか、不安はある」とも話す。

鹿児島出身で埼玉・鶴ヶ島市に住む東洋大総合情報学部3年・脇岡佑磨君の生活費の内訳は、収入15万(仕送り10万、アルバイト5万)・支出15万(食費2万3千、住居費4万、交際費0・5万1千、貯金1万、その他6万7千5百)。

一見、問題ないように見えるが、決して生活は楽ではないという。

「友達とのつきあひもあるし、後輩にはおごってあげないといけない。学生生活は意外とお金がかかるといのが実感」と話す。脇岡君は大学院への進学も考えているが、学費は親との約束で全学自費の予定。今からコツコツと貯金をしている。だが、大学院ではアルバイトの時間も限られるので、月額8万10万の奨学金の借入を検討中。やはり奨学金の返済は気になる。「きちんと就職できるのか、就職してもリストラという話も聞くので、将来的に返済していけるのか不安」だという。

現時点の学生生活を切り取った限りでは、二人に深刻な問題は無いが、友達や先輩のなかには、

「仕送り2万でアルバイトをがんばっている人」(鎌田君)や、「仕送りゼロで朝・晩アルバイトの掛け持ちをしている人」(脇岡君)など、厳しい学生生活を強いられる人がいるようだ。

アルバイトに奔走して学業に集中できなければ本末転倒。そんな学生たちに対する支援制度の拡充は急務である。脇岡君も、「社会全体で生活が厳しい学生を支援する仕組みがもっとできる」と話している。

学生寮や学生会館にも、食事込みで安価な家賃設定の物件がある。風呂共同などが多いが、共同生活的な雰囲気の中で交遊を深めるのもいいだろう。また、近くに兄弟が住んでいればルームシェアという方法もある。

一般の賃貸物件を探す場合は、大学が業務委託をする不動産業者で借りるほうがよい。学生専用の比較的安い物件が多く、トラブル回避にもつながる。「一般の賃貸物件では、敷金の未返済などのトラブルが起きないともいえません。

このように「いろいろと工夫す

らなければならない」といふ。このように「いろいろと工夫す

生活費のなかでは、食費と住居費が大きな割合を占める(図表1)。支出の66%は食費と住居費だ。この支出を一举に節約する方法として県人寮がある。

「県人寮は、食費(朝食+夕食)と家賃をあわせてだいたい5万円以内。老朽化などの問題はありますが、安いうえに、立地がよく、他の大学の学生と交流できるメリットがある。同郷の人ならば交流しやすい面もあるので、コミュニケーション能力を磨くこともできるでしょう」(新美氏)。

「食料は新聞の折り込みチラシを見て少しでも安いものを買っています。自転車も20分かけて買いに行くこともある」といふ。

その他、生活費の節約方法として、生活用品にリサイクル品を使うたり、兄弟のお下がりを使うなどの工夫がある。脇岡君は、「教材は、古本屋やネットで探して古本を購入している」といふ。

「アルバイトを増やしたくても、実行できるかは話が別。文系の学生は比較的アルバイトの時間はあるかもしれないが、理系や芸術系では時間が限られるのが現実。オープンキャンパスなどで実情を聞いてみる方がいいでしょう。それによって現実味のあるマネープランを立てられます」(新美氏)。

アルバイトでネックとなるのは、冒頭の鎌田君の話にあったように、就職活動だ。3年秋以降の就職活動では、アルバイトの時間が制限されるばかりか、就職活動で特別な出費が嵩む。これにはどう対処したらよいか。

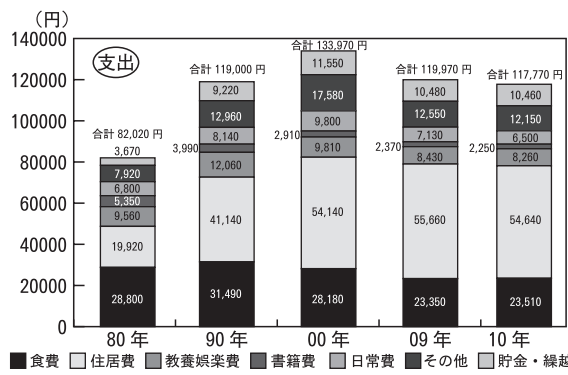
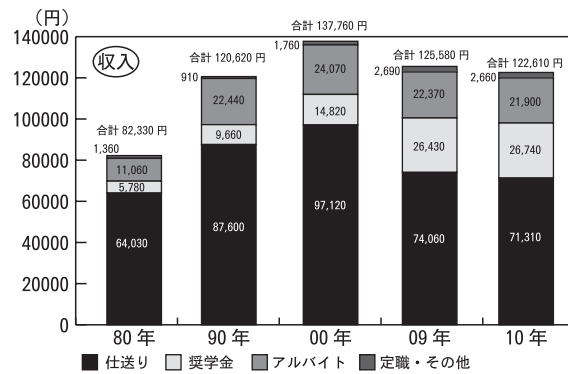
奨学金では借入額に目がいかってしまいが、むしろ注目すべきは月々の返済額である。

「毎月いくら返済するのがわかれば、意思決定しやすい」と新美氏はアドバイスする。

例えば、教育ローンの借入額100万円・返済期間15年の場合(図表2)、在学期間中は元金据置で利息だけ払えばよいので、毎月約2・4千円、卒業後は毎月約9千円の返済となる。100万円借りるとなると抵抗があるが、毎月9千円の返済と考えると、判断しや

食費込み、県人寮に注目

図表1 下宿生の1ヶ月の生活費



【全国大学生協連発行 CAMPUS LIFE DATA 2010】より

お金を借りる前に、節約を

学生の生活支援制度の拡充は望まれるところだが、本稿では、現状意識されている手段のなかで下宿生の進学マネープランを考えてみたい。自宅生よりも出費がかかる下宿生活を送るには、どのようなお金の準備や対策があるのか。進学マネープランに詳しいファイナンシャル・プランナーの新美昌也氏にレクチャーをお願いした。新美氏は、アルバイトと奨学金を

フル活用して自力進学を果たした経歴を持つ。「仕送りゼロでも下宿は可能」という言葉は心強い。前出の二人の学生の実践法なども交えながら、現代の下宿生のマネープランを考えてみたい。

まず、下宿生の進学マネーの流れをおさえておこう。支出の内訳は大きく「学費+生活費」、収入の内訳は「仕送り+奨学金+アルバイト」となる。この支出と収入のバランスがとれていれば、下宿生活は可能ということになる。

新美氏が示すマネープランの大きな流れはこうだ。

- ① 支出の予想を立て、把握する。
- ② 支出をトータルで見ても、それぞれ節約できないか考える。
- ③ 節約をしたうえで、不足分はお金を借りて補う。

一番の節約は学費の節約

では、どんな節約法があるのか。節約というと生活費を切り詰めるイメージがあるが、「支出はトータルで考えることが大事」と話す新美氏。「生活費を減らす前に、



ファイナンシャル・プランナー 新美 昌也
進学マネー講座: <http://shingaku.jimdo.com/>

「大学独自の奨学金制度」(参照)。「こうした制度はハードルが高いものもあるが、勉強をがんばって狙ってみる価値はある。結局、しっかり勉強するということが、オーディックスな準備になるわけです。そもそも成績が良ければ、国公立に合格し、大幅な学費節約になります」(新美氏)。

入学金や学費の免除・減免が受けられる大学独自の支援制度を利用する方法もある。各大学は特待生入試や給付型奨学金の充実を図っており、採用枠は増加傾向にある(本誌2011年8・9月号)。

就職活動前に貯蓄を

節約をしてもお金が足りなければ奨学金を借りるしかない。しかしその前に、奨学金はリスクがあるので、アルバイトの時間を増やして収入を増やす、という考え方が

借入は就職が大前提

それでは奨学金の借り方について考えてみよう。奨学金には、主に「国の教育ローン」と「日本学生支援機構の奨学金」がある。奨学金は借金になるので抵抗を持つ家庭は多いと思うが、今や3人に1人は奨学金を受給している。奨学金の利用は特別なものではなくなっている。

は、「お金を借りるにしても金額は少ないほうがいい」（新美氏）ということ。例えば、「一般入試の受験校が5つの場合、旅費も含めておよそ20万円。20万円くらいなら毎月1万円ずつ貯金していけば、まかなえる金額です」（新美氏）。実現できる範囲で目標金額を定めて貯金していく。そういう姿勢が求められる。

①まず、財産状況を把握する。「家計簿をつけることで貯蓄は把握でき、またどういうものか、支出の傾向がわかります」（新美氏）。
 ②節約を考える。支出の傾向から、不要な支出を減らす。
 ③収入を増やすことも考える。家庭の状況や雇用状況にもよるが、パートに出る方法もある。
 ④節約や収入増を図っても不足する分は、お金を借りる。入学前に借りられるのは、「国の教育ローン」しかない。

また、入学直後の春にも出費が嵩むことを想定しておきたい。この時期、生活準備や学校の教材、コンパなどでお金を使ううえ、アルバイトの収入もまだ期待できない。しかも、大学に入学してから申し込む奨学金（在学採用）が交付されるのは通常6月か7月（大学によっては4月や5月）。絶対にお金が不足する恐れがある。これに対し鎌田君は、「高校の先生から予約採用を勧められて利用した」という。日本学生支援機構奨学金の予約採用は、進学予定の前年に在籍する高校を通して申し込み、入学後に進学届の手続きをして、早ければ4月に初回振込となる。こうした申し込み方法があることも知っておきたい。

仕送りゼロでも下宿は可能

前述のように、いま下宿生の10人に1人は仕送り「ゼロ」だ。仕送り「ゼロ」でも進学・下宿は可能なのだろうか。

収入は「仕送り＋奨学金＋アルバイト」の合計。仕送りが「ゼロ」ならば、奨学金とアルバイトでまかなうしかない。だが、アルバイトにも限界がある。すると奨学金

下宿は大学の選択肢を広げる

どんな手段があるのかしつかりと情報収集すること、そして必ず工夫して節約し、少しでも借入を減らすこと。こうした努力によっ

に頼るしかない。新美氏の奨学金の試算（図表2）では、借入月額10万円・返済期間20年で、返済月額約2万7千円。20年という長期の返済期間は気になるが、決して不可能な数字ではない。それで人生の大きな目標に近づけると考えれば、安い投資といえるかもしれない。最終手段としては新聞奨学金がある。精神的・肉体的にもハードな仕事だが、「奨学金が給付されるうえ、給与が出て、住居費もかからない」（新美氏）という大きなメリットがある。ちなみに、各地方自治体にも様々な奨学金制度が用意されているので確認されたい。低所得世帯対象としては、社会福祉協議会の「教育支援資金」や、母子家庭対象の「母子福祉資金」などがある。「様々な手段があるので進学をあきらめないでほしい」と新美氏はエールを送る。

「私大のAO・推薦入試の入学手続きは高校3年の秋。ですから高校3年秋までに100万円を用意する必要がある。逆にこれさえ用意できれば、あとはなんとかなるものです。在学中は奨学金が利用できますから」（新美氏）。高校3年秋までに100万円を

て、誰でも下宿は可能になる。だから、下宿という選択肢を経済的理由だけによって排除することは避けたい。「下宿の選択肢があれば、大学の選択肢も広がる」（新美氏）ということを忘れてはいけない。学生たちの生活が厳しくなっているのは間違いない。学生にお金のことや心配させるのは一見酷に見えるものの、進学に対してより自覚的になるという面ではメリットもあるのではないかと。 「なるべく早い段階で親子で話し合う場を設け、子供に自覚を持ってもらうのがいいでしょう。自主的に節約して受験料ぐらいいは貯めるなど、子供でもできることはたくさんあります。進学マネーの準備は、親主体ではなく、子供主体でやらせるのが理想。進学にどれだけお金がかかるかわかれば、大学・学部選びも勉強も真剣になるでしょう」（新美氏）。

大学全入時代を迎え、ややもすると大学進学に無自覚になりがちだが、お金の面を通して子供たちに進学の意味や将来のことを考えってもらうことができるのである。（取材・文／沢辺有司）

図表2 返済シミュレーション（新美 昌也 監修）

●国の教育ローン

条件	借入額100万円、返済期間15年（元金据置期間4年）、金利2.85%（公財）教育資金融資保証基金の保証を利用	
保証料	142,398円（参考）返済期間5年では47,492円	
振込み額（借入額－保証料）	857,602円（注意）大学・専門学校等へは直接振り込まれません	
返済額	元金据置期間中	毎月2,375円（年間28,500円）
	卒業後	毎月8,834円（年間106,008円）
総返済額	1,280,088円（106,008円×11年間＋28,500円×4年間）	

●日本学生支援機構の奨学金（金利3%で試算）

借入月額	借入月数	借入総額	返済総額	返済月額	返済回数（期間）
50,000円	24か月	1,200,000円	1,448,002円	10,055円	144回（12年）
	48か月	2,400,000円	3,018,566円	16,769円	180回（15年）
100,000円	24か月	2,400,000円	3,018,568円	16,769円	180回（15年）
	48か月	4,800,000円	6,459,510円	26,914円	240回（20年）

高校3年秋までに100万円

ここまでは大学在学中のお金に

「借入をする以上、大学を卒業して就職して返済を行うこと、これが大前提。卒業・就職するには、しっかり勉強しなければいけません。このことを子供がわかっていなければ、借入はしないことです。就職状況が厳しいのは確かですが、実際に就職できている学生はいるわけで、そういう学生は大学のときから勉強しているものですね。もし就職できなかった場合には親が返済してもいいですが、はじめから仮の話をせず、子供には就職を意識させることが重要です」（新美氏）。

もちろん大学進学のための就職だけではないが、お金を借りる以上は、就職が最優先事項とならざるをえないという話である。就職が最優先事項となると、必然的に大学・学部選びも変わってくる。その学部・学科が自分の興味や目的と合致し、卒業まで学び続けられるところか。就職率はどうか、就職支援は充実しているか。こうした要素が、より重要な判断材料となってくるのである。

「私大のAO・推薦入試の入学手続きは高校3年の秋。ですから高校3年秋までに100万円を用意する必要がある。逆にこれさえ用意できれば、あとはなんとかなるものです。在学中は奨学金が利用できますから」（新美氏）。高校3年秋までに100万円を

てからでは遅いのだ。3年生になっ

「意識の高い家庭は、すでに学資保険などで準備していますが、そういう家庭は実は少数派。準備していない家庭のほうが多い」（新美氏）という。となると、高校入学と同時に進学マネーについて生徒・保護者に説明しておくことは、進路指導にとって欠かせない要素になるのではないかと。3年生になっ

ついて見てきたが、実はその前にクリアしなければならぬ問題がある。入試から入学手続き時にかかる費用のことだ。具体的には、受験料・受験旅行費・入学金・前期授業料などだ。新美氏は、この費用としておよそ100万円を目安に掲げている。

「国の教育ローン」は保護者、「日本学生支援機構の奨学金」は学生本人に返還義務がある。長期延納などの問題が起きたとき、法的措

すいだろう。ちなみに、返済は親・子供のどちらが行ってもよいが、法的には、「国の教育ローン」は保護者、「日本学生支援機構の奨学金」は学生本人に返還義務がある。長期延納などの問題が起きたとき、法的措

置が取られることがあるので注意されたい。新美氏は、「奨学金の借入をする際には3つの大前提がある」と強調する。それは「勉強・卒業・就職」の3つで、最終的には「就職」が最優先事項となる。